

氏名	なが ふち とも え 永 溍 朋 枝
学位(専攻分野)	博 士 (文 学)
学位記番号	文 博 第 73 号
学位授与の日付	平 成 9 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	文 学 研 究 科 国 語 学 国 文 学 専 攻
学位論文題目	北村透谷——「文学」の創造——

論文調査委員 (主 査) 教授 日野龍夫 教授 木田章義 助教授 大谷雅夫

論 文 内 容 の 要 旨

日本近代文学が成立しようとしていた時期に、様々な意味において先駆的であったといわれる北村透谷が、その評論活動において創出しようとした理想の「文学」とは、どのような文学だったのだろうか。

第一章 『護教』による人生相渉論争の再検討

明治20年代において最も重要な文学論争といわれる人生相渉論争(明26)は、透谷・『文学界』派と山路愛山・民友社との間にたたかわされた。おもに透谷の文章から論じられてきたこの論争を、愛山の未紹介資料『護教』等を見ることによって、従来、透谷と愛山との共通点とされてきたキリスト教が、実は両者の分岐点となっていたことを明らかにした。

『護教』は、人生相渉論争当時、愛山が主筆をしていたキリスト教週刊誌であるが、愛山は『護教』誌上においても、しきりに透谷・『文学界』派を批判していた。『護教』誌上の透谷批判は、人生相渉論争前夜から始まっていた。また、論争中透谷が言及している「十字軍」は、『護教』誌上の「唯心的凡神的傾向に対する十字軍」を指していた。従来、キリスト教界には『文学界』派非難の声が高かったといわれてきたが、非難の声は、キリスト教界の一部から挙がり、これを愛山が集めたものが「十字軍」だったのである。

『護教』を見ることによって、従来指摘されてこなかった、次のようなことが明らかになった。文学の人生への相渉り方を問題にする透谷に対して、愛山は『文学界』派の具体的な作品の傾向を問題にしており、二人には論点のズレがある。また、透谷対愛山の人生相渉論争の背後には巖本対愛山の「神学論」に関する論争があった。愛山は、「神学」「伝道」の問題と「文学」の問題を混同していたから、『文学界』派とは文学観を異にする巖本への攻撃に『文学界』派批判を包括してしまったのである。

文章・文学は、人の精神を変革させる「事業」であり「事実」から離れないという愛山の文学観は、“功利的文学観”であると論じられてきた。この愛山の文学観は、愛山の考えるキリスト教徒の任「日本の精神革命」と密接に関わっていた。愛山は、キリスト教徒でありながらキリスト教徒の任のために筆を

揮わないという理由で、『文学界』派の傾向がキリスト教文学に反する、と非難していたのである。

「教育ト宗教ノ衝突」が大問題になった当時の日本において、キリスト教関係者は「世に容れられない」。この「共通の地盤」の上で、透谷は「永遠の生命」を志向し、愛山は「攻撃の態度を取れ」と鼓舞するのである。この態度に関して「日本の精神革命」の志が「根底」であり、「文学」は第二義的であると、愛山は書いている。

キリスト教の立場から『文学界』派を批判することは、キリスト教週刊誌である『護教』誌上の愛山ばかりではなく、民友社全体の立場でもある。透谷は論争中「無闇に宗教と文学を混同する」ことを幾度も批判している。人生相渉論争は、文学を宗教のために用いようとする愛山・民友社と、このような宗教家思想からの文学の自律を考える透谷・『文学界』派との論争という意味あいの強いものであった、といえよう。

第二章 透谷と「硬文学・軟文学」

「硬文学・軟文学」という用語の初出例、当時における意味を明らかにすることによって、文学史の新しい様相を捉え、その中に、人生相渉論争、透谷を位置づける。

当時の新聞、雑誌をみることによって、「硬文学・軟文学」という用語は、竹越三叉の「文話数則」（『国民新聞』明25・10・23）を初出例として、民友社が使いはじめていたことがわかった。「硬文学」とは、民友社に代表される「史論」のことであり、「軟文学」とは「小説戯曲詩歌」、特に尾崎紅葉らの人情小説を指していた。民友社は、人情小説の衰退、「史論」の流行という時勢に乗じて、「軟文学」よりも「硬文学」は進歩したものであるとして、「硬文学・軟文学」の区別することに対して、透谷は、森鷗外や内田不知庵と共に反対していた。

従来の文学史では、明治二十年代における文学論争は、人生相渉論争も含めて、「硬文学と軟文学の対立」と捉えられてきた。研究の立ち後れている民友社側の発言をも検討することによって、「硬文学・軟文学」の問題に関する対立は、人生相渉論争とは別個の、より大きい対立であり、しかも論争の重要な契機となっていたことがわかった。人生相渉論争は透谷が、愛山の文章事業説を、文学界全体における「硬文学」の優位を主張する「反動の勢力」の一つとみたことに始まる。透谷は、愛山のいう「事業」が、「硬・軟」の区別と同じく「文学上の価値」以外、つまり「俗界」の「標率」であることを非難した。

人生相渉論争において透谷は「軟文学」派を代弁した、という根強い説がある。けれども、透谷は論争において紅葉らの文学を代弁したわけではない。明治二十年代はじめの文学極衰論争当時から人生相渉論争に至るまで透谷は、紅葉らの文学が「肉情」「好色」を写し、「霊」の次元にある「恋愛」を描いていないことを批判している。愛山に対しても、透谷は「霊」の次元を求める。透谷は、紅葉批判において培った文学観をおすすめして愛山と対決した、とすらいえる。

透谷は、「小説戯曲詩歌」という意味での「軟文学」を代弁したわけでもない。透谷ら『文学界』派は「史論の中の人物評」の代表作家でもあった。そして、「人物評」の着眼点について、「物界」「事業」か「霊界」「文学上の価値」かが民友社との対立点であるとしていた。この対立点は人生相渉論争の対立点に直結する。民友社もまた、『文学界』派の動きを「硬文学」の中に捉えていた。

透谷が求めた「純文学」は、いわれてきたような「軟文学」と同義語ではない。「霊」の次元をめざす

文学であったらう。

第三章 透谷におけるキリスト教

透谷は、自由民権運動参加における挫折ののち、妻となる美那子に導かれて入信する。従来、キリスト教教義に照らし合わせて論じられてきた透谷とキリスト教との関係を、美那子の信仰と比較を手がかりとして再検討する。

遺族の方に見せていただいた美那子の晩年の日記等を見ることによって、美那子にとっては、生活していく上での困難に打ち勝つ支えとして信仰があり、規範としての神をまず信じ、「懐疑や煩惱」をいわば神に預けることによって神の為に働くことに専念するところに、信仰の基本があることがわかった。

一方透谷は、神と冥交する瞬間に開かれる「心の奥の秘宮」における「美、真の境地」を専念祈欲することを主張している。キューカリズムの影響は言われてきたように大きいであろうが、同時代のキューカー新渡部稲造にみられるように、キューカリズムにおける神と冥交する「心」はそれに基づいて行動するものであり、透谷のように「心」そのものがめざされるわけではない。

透谷のキリスト教は、入信時における自らの「心」の変化への凝視を決定的基盤としている。入信にあたって透谷は、神の前に「自己分析」し、かつての「世に尽くし民に致さんとするの誠情」が回復したことを見ている。現実社会の中で、現実的にも精神的にも生きる足場を失っていた透谷は、現実社会とは異なる次元から自己を見るための視点としての「神」を知ることによって、かつての「誠情」の回復と共に「生」を回復したと考えられる。自らの「再生」に関わるが故に一層、透谷は神をリアルに実感し得たらしい。

透谷のキリスト教評論における主張は、「心を寄するものを求めて」やまない「我が心」という透谷の心性に根ざしている。このために「心」の向かう先は、「神」に限定されず、「絶対」「天国」「真善美」「森羅万象」「宇宙」等と言いかえられる。神との冥交ばかりではなく、これらとの透谷自身の冥交体験の実感の追求が、彼の主張であったと考えられる。透谷は「我が心は洵れなむ」と表明して、自決への道をたどる。

入信の事情は、透谷がキリスト教を「生命思想」と捉え、現世的「実行」に対して「外なるもの」(神)と冥交する「心の経験」こそが「実行」であるというような価値観の転換を主張することとも関わっていると考えられる。「心」を重視する透谷のキリスト教の主張は透谷にとっては、生きることそのものと結びついた信仰、思想であったと考えられる。

第四章 透谷の文学論とキリスト教思想

透谷はキリスト教から、現実世界とは異なる次元にある、我の「心」の中にありながら「心」の外なる「一神」の支配を受ける世界という観念をつかみ、この「他界に対する観念」に宗教と文学との根底を見いだしたことをもとに、文学論を展開した。

キリスト教評論としてのみ読まれてきた「各人心宮内の秘宮」は、文学における「心」「心宮」の追求や、文学作品の受容によって理解した世界観等、透谷が様々な文学体験を織りまぜて書いたものである。

ここで確立された「心の奥の秘宮」をこそめざす透谷のキリスト教思想は、現実世界の奥にある「哲学を以ても科学を以ても覗ひ見るべからざるもの」(「ハムレット」)を「天と地の間」に自覚することにつ

ながる。そこにうごめく「一微物」としての「我」という存在把握をも生み出す。我国に理想詩人を願求する、すぐあとの文学論「他界に対する観念」は、「ハムレット」中の同じ観念に注目して書かれる。そして、人生相渉論争において透谷は、愛山のいう「世を益する」文章に対して、「空」すなわち「人間の最奥なるところ」に広がる、いわば「他界に対する観念」をめがける文学を主張するのである。

「内なる生命」をはじめとして透谷との類似を指摘した「独逸神秘神学」等、キリスト教では一般に、「神」—「現実世界」という関係において、「我」を捨てて「神」にゆだね、現実世界に神の国を実現することが使命とされる。これに対して透谷のキリスト教は、「神」—「心」—「現実世界」という関係において、「我が心」が「したふ所を求める」ものであった。

キリスト教における、愛山さらには植村正久と、透谷との違いは、文学論における両者の違いと軌を一にしている。「神」故にかえって現実世界に働くことを主張する愛山らに対して、透谷は「虚界」に「登攀」する「文士の戦」を主張し、こうすることが究極的、むしろ根本的に現実世界の衆生を救うことになる、と願望の形で書くのである。

「文芸上の理想派」は、神より来る「感応」である「インスピレーション」を受くる、と書かれるが、「感応を感じ、感応によって再造された「内部の生命を観察する」主体としての「我」が、「神」にゆだねられることはない。これに対して、愛山は「自己を恃」まず「神」に対することを「インスピレーション」としていたことを見た。

単なる「詩人」という時には「没我」を言い、キリスト教と密接に関わる理想の文学を論じる時に「我」を強調する透谷の主張は、キリスト教からみれば問題がある。透谷のいう「我」は、思考の起点、「文芸上の理想派」と渾然となって理想をめざす主体、としての「我」である、と考えられる。「我」を思考の起点とすることは、蘇峰に代表される当時の文章には意外に少ない。

宗教と文学との間に、両者に共通する観念を「想像」することによって、理想の文学を創出しようとした透谷の評論は、文学と宗教とがいかに関わるかという問いに対する、一つの解答たり得ているのではないだろうか。

第五章 「厭世詩歌と女性」論——美那子体験の意味——

透谷の評論活動の本格的出発となった「厭世詩家と女性」を、美那子の新しい資料から透谷と美那子との恋愛、結婚の意味を再考することによって、読み返す。透谷は美那子体験をふまえて、男女関係ではない恋愛論を書いたのである。

従来混同して理解されてきた、「厭世詩家と女性」と透谷の美那子宛書簡との間には、二つの大きな相違がある。「厭世詩家と女性」前段には恋愛期の美那子宛書簡にあった「共に相慰め、相励ます」恋愛は書かれていない。恋愛は「想世界と実世界との争戦より想世界の敗将をして立籠らしむる牙城」、「自身の意匠」を愛するものであると定義づけられている。「厭世詩家と女性」後段に書かれる婚姻の不幸の原因は、結婚後の「花巻より」美那子宛書簡に書かれたような妻の不足怨言にではなく、厭世詩家が「実世界」と相容れないので「実世界」にくみこまれる婚姻に失望する、ということに求められている。

「厭世詩家と女性」は、厭世詩家に焦点をおいて婚姻を論じている。このため、論中に引かれた当時の合性論等のように、女性に責任を転嫁する論に陥っていない。その一方では、「厭世詩家と女性」につい

て定説となっている「想世界と実世界との対立」の追求を、恋愛から婚姻へ段階的に展開させることができずに、不徹底にしまった。

恋愛の意義を「牙城」「自らの意匠を愛する」ことにおき、婚姻の不幸を厭世詩家と「実世界」との間の問題とする透谷の論に、独立した性情や思想をもつ実在の女性は関与していない。女性は受動的に不幸となるのを嘆じられている。これは、透谷が美那子体験において実際的美那子を見ていなかったことと、結びついていると考えられる。

恋愛中の透谷は美那子に、自らの望みを投影し、自分の小説家志望を理解し励ましてくれる第一の読者であることを求めていた。結婚後、美那子は彼女の望みに近いと考えられる婦人矯風会の運動のごく身近にいた。「花巻より」の美那子宛書簡は、必ずしもそればかりではなかったはずの美那子の不満を「生活上の不満に集約して、その「生活」に対立する「詩人」の任を理解する妻たれと訴えていた。透谷は自らの文学への志に精一杯で、実際的美那子の望みや姿を見ていなかったと思われる。

「牙城」「自身の意匠」という恋愛の定義は、「厭世詩家と女性」冒頭の「恋愛は人生の秘鑰なり」と関わって、「恋愛」「人生」の新しい意義の発見であり、透谷の後の文学論の主張にもつながる。ここに恋愛の意義があり、婚姻の不幸は、男女間ではなく実世界との関係において生ずるという透谷の論は、現代に通ずる透徹した論かもしれない。

論文審査の結果の要旨

本論文は、北村透谷の文学論について考察したものである。全5章を通じて、明治20年代の新聞・雑誌等を丹念に調査し、確実な資料に基づいて立論するという実証的な方法が貫徹している。理論先行の弊なしとしない近代文学研究の風潮の中にあつて、論者が地道な調査の努力を厭わず、幾つかの新しい資料を発掘し、それによる問題点を提示し得たことは、評価される。

第1章「『護教』による人生相渉論争の再検討」は、透谷の「人生に相渉るとは何の謂ぞ」（明治26年2月）をめぐる、透谷と山路愛山との論争を考察する。この論争は従来から有名なもので、もっぱら透谷の側からとらえて透谷の文学自律論と愛山の文学効用論の対立と理解するのが定説である。論者は愛山が編集人を務めていたメソジスト派の週刊機関誌『護教』を調査することによって、この理解を更に緻密なものとした。たとえば、あたかも論争と時を同じくして、明治24年の内村鑑三の不敬事件を蒸し返して、忠孝とキリスト教は矛盾すると述べた井上哲次郎の『教育と宗教ノ衝突』が明治26年4月に刊行されたが、愛山・透谷が同年4・5月中に発表した幾つかの論文は、井上の議論に反発したものであるということは、『護教』の調査によって初めて判明したことであり、両者の反発の仕方の相違に人生相渉論争の対立点が浮き彫りにされているという論者の指摘は説得力がある。

第2章「透谷と「軟文学・硬文学」」は、明治25年頃から文壇時評で用いられるようになった軟文学・硬文学という用語について検討し、それと人生相渉論争における透谷の立場との関連を考察したものである。軟文学は尾崎紅葉等の人情小説、硬文学は愛山や徳富蘇峰等が推進した史論を指すが、従来は深い検討のないまま、これを人生相渉論争と簡単に対応させ、透谷は硬文学に反対し、軟文学を擁護したと論ぜられてきた。論者は、『国民新聞』『国民之友』『早稲田文学』『しがらみ草紙』等を調査することによって、

問題がそのように単純化できるものではないことを明らかにした。論者によれば、軟文学・硬文学は、その明快な図式化から予想されるほどには当時において広く行なわれたものではなく、民友社一派のみが用いた語であり、透谷のみならず、森鷗外や内田不知庵も、そのような図式化に否定的であったし、透谷自身、硬文学たる史論の優秀な書き手として当時から定評があった。軟文学・硬文学図式と人生相渉論争との関わりは、民友社＝愛山が文学効用論の立場から文学の硬軟を区別し、硬文学を優位に置いたことに、透谷が反対したところにあるという論者の主張は、首肯できるものである。

第3章「透谷におけるキリスト教」・第4章「透谷の文学論とキリスト教」・第5章「[厭世詩家と女性]」論は、透谷とキリスト教との関わりを考察したものである。キリスト教が透谷の思想に対して重大な役割を果たしたことを認めない研究者はいないが、キリスト教に深入りしなくても透谷を論ずることは可能であるため、透谷におけるキリスト教は以外なほど概念的な理解で済まされているのが実情である。論者は、透谷のキリスト教入信に決定的な影響を与えた妻美那子の、透谷の遺族が保管していて未公開の日記や、美那子が英語教師として勤務していた女学校の校内誌などを渉猟して、美那子の信仰の様相を調査し、それと対比する形で透谷におけるキリスト教を考察した。論者が明らかにした透谷の信仰とは、キリスト教的な実践にほとんど関心がなく、ややもすれば神を森羅万象・宇宙などといい換える、汎神論的な陶醉というものであって、その結論自体は、これまでにいわれてきたこととさほど変わらない。ただ、結論を支える資料の厚みは、従来例を見ないところと評してよい。

以上のように、本論文が従来未紹介の資料を丹念に渉猟することによって、透谷研究の上での新見を幾つか提示していることは疑いない。しかし、新しい資料の発掘、まだ論じられていない問題点の発見に意を注ぐあまり、透谷へのオーソドックスな取り組みに手薄であるという憾みがある。透谷研究の幅を広げたことは十分認められるが、深さをどの程度掘り下げ得たかは、やや心許ない点がある。透谷研究の究極のテーマは、美しい理想を追えば追うほど、世間から「高踏派」として批判され、ついには自殺に追い込まれるという、透谷の孤立の様相を考察するところであろう。資料博搜の労を厭わない論者は旺盛な研究意欲が、今後は深さの掘り下げに向かうことを期待したい。

以上審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。1997年1月14日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認められた。